〈同和教育〉の誕生
乾武俊と被差別部落の民俗文化研究

友常　勉

1　はじめに

部落解放研究所(現・部落解放・人権研究所)・伝承文化部会は,1982年から83年にかけて大阪府下の被差別部落を対象に，民俗調査・聞き取りを実施した。部落解放研究所編『被差別部落の民俗伝承[大阪]古老からの聞き取り』上下二巻（解放出版社1994－1995年）として刊行されたこの調査は，大阪芸術大学の映像班の協力のもとで，府下全域の被差別部落を対象としておこなわれた画期的な調査事業であった。このとき，伝承文化部会において部会長として調査の中心を担ったのが乾武俊であった。

乾武俊は1921年，和歌山市に生まれ，東京高等師範学校で学び，郷里の日高中（旧制），西和中，伏虎中，山手中，そして信太中で教鞭をとったあと，大阪府教委指導主事，和泉市教委教育次長兼同和教育室長などを歴任した。高等師範時代は能勢朝次の門下で学び，保田與重郎を師として仰いできた。ところで乾の最初の著作は詩集であり，出発点は詩人であった。この出自は乾の知的営為を決定づけている。実際，伝承文化部会の民俗調査は，詩人という出自をもつ乾武俊の詩学――詩的想像力によって導かれていたといっても過言ではなかった。

本稿は，乾武俊が，詩人としての活動から始め，被差別部落の民俗文化調査・研究にもとづいた〈同和教育〉の方法論を確立するにいたるまでを追いながら，被差別部落の民俗伝承研究と〈同和教育〉との結合を可能にした，ひとつの詩学の存在を明らかにすることを目的とする。それによって，同和教育史および被差別部落の民俗伝承研究史に，乾武俊の軌跡を位置づける。それは，教育学や識字教育からではなく，民俗伝承の調査研究を母体にして，手探りで〈同和教育〉を創造した乾の達成点を明らかにすることである。同時に，今日の1950年代の文化運動研究に対して，部落問題研究からのアプローチの可能性を，問題提起的に示したいと考える[1]。

なお，本年（2015年）に，乾武俊の著作のうち，仮面論と民俗芸能論の観点から編纂された論集として，山本ひろ子・宮嶋隆輔編『民俗と仮面の基層へ　乾武俊選集』（国書刊行会，2015年）が刊行された。この選集は乾武俊における仮面論と芸能論のエッセンスをよく伝えるものである。これに対して本稿は，その詩学の形成過程を明らかにし，それが被差別部落を校区にもつ学校と地域を舞台にした〈同和教育〉の模索を通してどのように成立していったかに注目するものである。

---

1 鳥羽耕史は、近年のサークル運動研究やドキュメンタリー映画研究の成果を踏まえて「何重もの忘却にさらされた時代」としての「1950年代」を、「記録」というキーワードで見事に描写している（鳥羽2010）。これについては私も北関東の版画運動を中心に調査研究を進めてきた（友常2010、同2012）。本稿はそうした1950年代文化運動論に、詩学と民俗伝承研究という回路を接続しようとする試みでもある。

2　詩学の形成

乾武俊の論文集『民俗文化の深層　被差別部落の伝承を訪ねて』（部落解放研究所, 1995年）には，民俗伝承調査の始まりと，大阪における同和教育の幕開けとなった1961年の「山手中学学力テスト白紙提出」事件との重なりに触れた文章が収められている。同書の「あとがき」から引用する。

> 〔中略〕冒頭の「葛の葉伝説の源流」だけは二十余年前の文章である。一九六一年前後のことをふりかえって書いている。その年の十月，山手中学学力テスト白紙提出は，大阪における「同和」教育の幕あけになった事件のひとつであるが，私はその煽動者のひとりと目され，山手中から信太中へ転勤を命ぜられた。しかし，そこでも「危険な教師」と見られた私は，学級担任を持たせてもらえず，またもとの教え子たちのいる山手中学校区に入って行くこともできなかった。信太中学で私のまわりに集まった数名の教え子たちと「郷土研究クラブ」を作って，地もとの「葛の葉伝説」の聞きとりを始めた。それが私の伝承文化への出発である。（乾1995：226頁）

ここに触れられているように，乾武俊は，1959年（昭和34年）から2年間在職した和泉市立山手中学校時代の1961年に，全国学力テスト（全国中学校一斉学力テスト）の実施に反対する「学テ闘争」にかかわった。闘争後，圧倒的な生徒の指示を得ながらも，父母の激しい反対に合い，乾はその責任を取らされて職場を異動させられる。

山手中学校は全校区が被差別部落である。当時の主な地域産業は人造真珠の製造であった。それは下請けの家内工業であり，子どもたちも小学校三年生ぐらいになると「玉とおし」の仕事に借り出された。その結果，乾によれば，1961年の長欠生徒数は在籍319名のうち34名で，全体の10･7パーセントに達していた。これは1958年の全国平均1･6パーセントの約十倍にあたっていた。乾は国語教師として，生徒のひとりに「わたしたちのねがい」と題した作文を書かせている。この作文の冒頭を引用しよう。

> わたしたちの学校は校舎は小さいし，運動場もせまい。教室はみんなで八つです。わたしたち１Ｂの教室から，運動場の右がわを見れば墓場です。お墓と運動場との間にはかこいがありません。だから野球部の人びとが練習をしている間，ときどきボールがお墓の中へはいるのです。みんなこまってさがしています。はやくへいかあみでかこいをしてほしいとなん度思ったかしれません。〔以下略〕（乾1972：104頁）

大阪府下の弁論大会でこの作文は一位になり，親たちは仕事で忙しいのにもかかわらず，集まってこの弁論を聞く場をつくった。その時，親たちは感動して拍手が鳴りやまなかったと乾は記している。しかし，先に記したように，この父母たちが，学テ闘争では，教員の闘争を支持した生徒たちを，乾たち教員から引き離そうとしたのであった。この闘争と，とりわけその後の経験は乾武俊の文化運動・文化研究の原点となった。

ここで時計の針をもどして，乾の文学遍歴に焦点をあてていこう。1940年代から敗戦までの思想のあゆみについては，乾武俊『詩とドキュメンタリイ』（乾1962）に収録された小説「1945・影の部分」とその解題としての「ナルシス・1945」であつかわれている。東京高等師範学校の学生であった乾は, 1940年・41年のころ，「朝刊で都内映画館の番組を隅から隅まで点検し，日々の講義をボイコットして，くりかえしそれらの映画を観て廻った」（乾1962：166頁）。ジュリアン・デゥヴィエ『舞

踏会の手帖』は40数回観たという。しかしまもなく肺結核となり，和歌山に帰郷。1941年12月8日の開戦の報は病床で聞き，1943年の学徒徴兵には丁種兵役免除となった。高等師範学校を中退するとき，軍事教官から「お前のような奴は，これからの日本には要らないのだ。さっさと死んでしまえ！」と罵られた。

ところで「無為徒食の結核患者」としての乾はこの時代に，ひとつのイメージを抱えながら対抗していた。

乾の第一詩集におさめられた詩「面」が引用されている小説「1945・影の部分」に，大塚のパンテオンという喫茶店が登場し，「沙智子」という女性が描かれていた。乾によれば，パンテオンは実在したが，「沙智子」は，パンテオンで働いていた「少女」の像と，阿武隈療養所入院時期の前後に親交のあった女性詩人と，そしてさまざまな人の像が重なってできあがったものだ。このパンテオンの少女のイメージが乾を支えていた。

> 無為徒食の結核患者の一括銃殺という事態のおとずれを，刻々の被害妄想として生きねばならなかった。玄関に来客の足音がすれば，憲兵がぼくを拉致しに来たと思い，一瞬心臓の鼓動のとまるときがある。ぼくは不動の一点を凝視していた。パンテオンのイメージをミュトスとして純化することによって，戦争という現実に対抗し，病床に生きたのである。（同上：166頁）。

ひとりの少女の像を純化しつつ抱き，それがあたかも能の〈面〉のような変貌をとげていく。この形象の成立過程は，のちの乾の能面論に直結している。実際，乾は次のように手の内をさらしていた。

> 和歌山の病床にいて，ぼくのパンテオンのイメージは，徐々に能楽のなかの女の像のようなものに凝結していった。やがて審美的なその像は，終末を生きる哲学的な基礎を求めて，道元の世界へ傾斜して行った。道元はぼくを行動にさそい，ぼくは血痰を吐きながら，戦争末期，代用教員として教壇に立ち，生徒とともに深夜航空機工場でエンジンを造り，炎天のもと発動機油の原料になる松の根を掘り起こした。（同上：167頁）

敗戦までの数ヶ月を乾がどのように迎えたか，私も乾自身から聞いている。それは死に直面した陶酔の日常と非日常であった。

> 敗戦の年6月，ぼくは開腹手術を受けるために和歌山赤十字病院に入院し，そこで焼爆を受けた。防空壕から這い出たとき，すでに病舎は家屋の高さの四,五倍にも燃えさかる火焔に包まれており，唯一の脱出口である裏門には高い鉄扉が閉ざされていた。血路を失った数百の患者は，その鉄扉の内側に釘づけになり。ただもうしずかにうねりのように揺れていた。…“見上げると，ぼーっといちめんに赤く焦げた高い空から，無数の，実に無数の，金色の火の粉が，雪のように舞い下りてきて，じっとその舞い下りてくる限りない火の雪を眺めていると，そのとき，鮮やかに，焼けた空間にパンテオンの映像が浮かんだ”。

乾は，この映像を胸に秘めて，死を覚悟し，「しびれるような幸福感」に充たされた。そしてパンテオンの映像は，「観念の侵食を受け，火焔のなかに忿怒しつつ動かない，不動明王のイメージに変質していった」のである。

紀伊半島御坊海岸は米軍上陸と本土決戦の候補地と目されていた。乾は，父から譲られた貯金通帳から預金を全額引き出して日本刀を購入し，志願して最奥地の船着村淘汰寺に，地元の生徒20数名とこもった。御坊を中心とした本校や周辺の部隊が玉砕したとき，分校部隊は山

岳を利用して最後のゲリラ抵抗を組織せよという指示であった。書院に端坐して刀身にうち粉を打ちながら，道元をひも解き，乾のイメージは戦争協力のイメージへと変質していった。乾は戦争が駆り立てた陶酔的で審美的なロマン主義を心底から体験したのである。しかしまた，そのさなかに「もの」にも遭遇したと乾はいう（同上）。

「病気療養中，大阪上六交差点で見た群像のながれのなかの，将校の見えない顔。彼は顔の前面にカーキ色の被布をかぶせられ，左右を憲兵にかこまれながら，ぶつかるようにぼくに接近し，すれ違った…ぼくだけが見たのだ。見てはならないものを。それは感覚的なショックとしてぼくに来たが，まだその意味が見えなかった」。

おそらくは軍法会議による銃殺を前にした将校の姿である。戦争体験が戦争のなかにおけるこのようなものとの出会いのことであると乾はいう。死の恐怖のなかの陶酔，そのなかで変質していく〈イメージ〉，そしてこの「もの」との出会い。これらが，戦後の〈ドキュメンタリィ〉という方法へと収斂され，再び浮上し，乾の戦後の方法論の基礎となったのである。

3 〈ドキュメンタリイ〉の方法論と「最後の詩」

戦後，教職についた乾は，1948年に結核を再発し，阿武山療養所に入院する。そこで「鹿」「山間療養所」「霧」「鉄橋」「ピエタ」「ピカソ」「物体の落下について」などの作品が書かれ，そのいくつかが『詩風土』に掲載され，1952年の第一詩集『面』に収録される。

そのなかから「山間療養所」を引用しよう。

きのうまで，落葉の音があんなにあわただしかったのに，ひとばんのあいだに，梢らはもうからっぽのようにあかるくなっている。風のないこゝの谷間に，うしなわれたものゝかおりがのぼり，しゝ゛まがえがく日だまりのなかに，もはやことぎれて動かない，白いけだものの姿があった。

病むものはひとりではない。それは無心の少女にも……。少女の声は日々にしわがれ，だから，少女は，だまってゆっくりと髪のりぼんを結びなおした。（あんなに澄んでいたおまえの声はどこへ行ったか）そして今，しんかんと，鴉が腐肉をつつくのを。うすらびが，ひねもす空にながれるのを。あゝ，それら，ほろびてゆくものゝむなしさを。

谷間をこめて，明日から雪が来るかもしれない。日ざしはすでに移っていった。ようやくにしみついて来た底冷えのなかに，それが，もう，しびれるような日々の，最後なのかもしれなかった。（乾1962：172頁）

結核療養所がつくりだす抒情的ロマンチシズムがよく表出している。しかし，翌年の1949年には下山事件・三鷹事件・松川事件が起きる。1947年の二・一スト敗北後，戦後の世相はふたたび緊迫していた。「九月革命説が異常なリアリティをもって伝えられ，その空気は山のなかの，療養所にまで不安な（その当時のぼくには不安な）緊迫感をもってのぼってきた」（同上：173頁）。とはいえ乾はこの時期の心象を，「自慰的なナルシシズムの円への，またしてもの回帰である」と記している。そして，「この円が破れるため」の「内的動乱」を期待している（同上：174頁）。

この療養所で乾は恋をしている。それは1951年の退院後に恋愛関係に発展したようである。それは乾の家庭を破壊の危機にさらした。

「ある詩人への愛がぼくの家庭をこわし

つつあった。その愛がサナトリウムのなかにとざされていたあいだは，それは愛のなかのみの出来事であったが，一九五一年に退院し，通勤の途次，紀の川の鉄橋を渡り自宅に帰る夜の途次，急速度に移動する時間と空間は，もはや愛を愛のなかだけにとどめることをゆるさなかった。リルケが『マルテの手記』のなかで，“ただ二人きりの人間でなければならぬ”“第三者というのは決してほんとうのものでない“（大山定一訳）――不純物だといったあの第三者が，つねに二人のなかに入りはじめた。そして事実，ぼくの家庭はその三つの核によってこわれたのである。…形而上の愛を，形而下の嫉妬や欲望に置きかえるというあやまちを，ぼくも妻も犯したのである」（同上：176頁）。

その結果，女性は精神病院で治療を受けることになり，乾も精神病院を訪れているようである。それは「詩人であることの劫罰のようなもの」であったと乾は述懐している（同上）。この経験は作品「ピエタ」に次のように影響をとどめている。「逃れようとして，頑なに壷を見ていた」「突如ピエタが起ち上り，架を外された遺骸のように僕の上に崩折れた。壷の壊れる音がして，誇りに青ざめた女の顔が，瞬時僕に正対し，白い破片が散らばっていた」（同上：177頁）。

抒情的ロマンチシズムから〈もの〉への意識の移行にあたっては，こうした，愛の崩壊という経験も反映しているようである。それは作品「物体の落下について」に端的にあらわれる。

D百貨店七階の屋上から投身自殺した青年がいる。新聞記事によれば失恋の結果の精神錯乱というが，彼の生涯の終局を飾るリリカルな落下は，さぞわびしい一齣であったろうと想像する。／キングコングという怪物があった。彼は文明に挑戦し，挙句の果て，エンパイヤ・ステイツ・ビルディングの屋上で戦闘機に射殺される。かくて，その巨大な物体の落下。（中略）キングコングは八・八秒で地上に落下し，この際地殻に与える衝撃は一秒間の放出エネルギーに換算して，二八〇兆三五〇億エルグである。／ところでかゝる痛快なエネルギーに快哉の拍手を送った時，私が即座に想起したのはかのソヴィエットの大自然改造計画であった。〔以下略〕（同上：181頁）

落下と速度を主題としたこの作品は，1951年にソ連のスパイとして処刑されたローゼンバーグ夫妻の事件を伝えて終わっている。処刑までの経過がリアルタイムで世界に報道されたこの事件もまた，「速度」にかかわる文化的な事象であった。乾はこのとき「現代のイメージ」，「〈物〉と〈物〉との錯綜する関係の分であり，追及」に注目している（同上：182頁）。今日の私たちの語彙でいえば，表象分析であり，スペクタクル社会批判である。実際，ギー・ドゥボールらシチュアシオニストたちの活動期と，都市文化の興隆を目撃していた乾らの文学運動の時期は重なっている（ドゥボール2004〔1967〕）。

こうした詩人としての関心の移行とともに，乾は日教組和歌山支部の組合活動に精力的にとりくむようになる。「完全に家庭を破壊されつくしたとき，ぼくのナルシシズムもまた完全に破壊されていた。ぼくは凶暴に，しかし精密に行動に立ちむかっていった。…1951年，対日平和条約は調印され，それと抱き合わせに日米安保条約もまた調印された。翌52年は血のメーデー。追い打ちをかけるように，『破防法』『スト規制法』が成立し，『教育二法案』（教員の政治活動を制限する法案）はすでに国会に上程されていた。教組の戦術会議は日夜つづいた」（同上：183頁）。

1954年には自衛隊法が施行され，警察予備隊の保安隊への改組にとどまらず，陸海空の各

自衛隊が成立した。乾は芸術的ナルシシズムと政治的アクティビズムの両極を抱えながら，複眼的な表現方法への移行を実感している。

眼

その眼の中を斜に傾く地平線があった。そこをなだれて行く難民の群があった。頽色した地肌の上を，それはボロのように飛散する遠景であったが，ヴィルスに蝕まれた眼やにが，哀訴の色彩になって，焦点のきまらない眼球の前面で渦巻いていた。
ミラノ。政治犯の面上に黒布をかぶせる。それから，その首に綱を巻く。（中略）
ある時，遠ざかるロケット弾から見た地球の姿を映画で観たが，一箇正常な球体が次第に朦朧たる縞瑪瑙のようになり，いくつかの膨れ上がった静脈がその表皮を覆い始めた。しばらくしてその静脈も見えなくなったころ，それは宙に浮かんだ孤独な白内障（そこひ），ヴィルスに侵されて白濁する犬の眼球のようであった。（189頁）

乾はこの作品は，複眼を一点に絞る原点が欠如していることが欠点であると述べている。しかし，ナルシシズムや抒情から離脱し，政治を複眼の一つの眼にするための技術が，ここで体得されたのである。そして，「詩としてはぼくの最後の詩である」とする，謡曲に題材を得た「隅田川物狂」と「ダイヤとカルネ」が書かれる。この詩はどちらも散文詩ではなく，行分けして書かれている。

隅田川物狂

隅田川物狂／女の顔は千年不易か／シテが橋懸りにかかる時の／流れる殺気を知っているか／揺れ動く白っぽい画面の中で／振り返った女の顔は／能面のように固かった／サイパン／断崖の真下から聞こえてくる海／風に千切られた襤褸の肢体に／君等は好奇の照準をしたか／窓から来る蒼白の光線が／ケースの中に凝結するところ／小面　泥眼　増　痩女／君等は好奇の照準をする／いくたびも　いくたびも　繰り返しする／相馬ヶ原／霖雨しきり／うす暗い襖のかげの／死者の頭上　短刀一振／農婦は口の中で消えてゆく和讃をつぶやき／またひとり／能面のような女の唇を／水でしめした

ダイヤとカルネ

ゆるやかな衝撃がきた／新鹿行168夜行列車が／加茂郷トンネルをくぐり／崖上の国道と接近する／暗いカーヴにさしかかった時／連結部ドアが静かにあいて嬰児を負った女がひとり／通路をぼくに近づいてきた／一瞬　乗客は埋没し／冷たいガラス窓につつまれて／広い車輛は／女とぼくの二人になる／　崖の上から情夫に突かれ／
今しがた孕んだ女が死んだのだ（中略）
男の自動車は／崖を立ち去ると／国道二十六号線を／大阪に向かって北上していた／遠く南／和歌山の方から／パトカーのサイレンが／断続して聞こえていた／共闘本部では／その夜会議が持たれていた／××法を阻止するために／ゼネストを組織する（以下略）

「隅田川物狂」に登場する「相馬ヶ原」は，1957年に群馬県相馬村の相馬ヶ原演習場（現・榛東村）で，在日米軍兵士のジラードが，屑鉄拾いで薬莢を拾っていた婦人・坂井なかさんを照準内に誘いだして射殺した事件である。坂井さんは被差別部落出身の女性であり，演習場の屑鉄拾いには多くの部落の人々が従事していた。ジラードは本国送還となるが，革新勢力による国民的な反対運動が組織された事件である。ただ，子別れの謡曲「隅田川」の母子に重ねて，日米安保条約下の事件を配した作品であるが，イメージのまとまりがあまりよくない。相馬ヶ原事件と隅田川の母子の情念がつながら

ないまま，政治的現実にふさわしい表現が見出されていないようである。

次の作品「ダイヤとカルネ」については，乾の自作註によれば，「もはや詩の方法ではどうしようもない決定的な破綻が示されている」。作品のなかで「ぼく」を監視している「見えない糸」には，勤評闘争に参加する組合活動家であった乾が体験した，「不安な政治のミステリー」が投影されている。戦時下において垣間見た，不気味な政治的圧力が個人の生活を圧迫していた。それが抗いがたい国家の歴史的な力でもあることも認識されはじめたのである。「ぼくを決定的に変え，ぼくをドキュメンタリィの道へつれ出したのは，1958年の和歌山県勤評闘争の体験である。この年の闘争は，政治のミステリィを数多く内包しており，そこに埋もれた怨念は質量ともに限りがない」（同上：199頁）。政治的な覚醒が語られているこの作品において，同時に指摘しておきたいことは，政治的な題材を扱いながら，「見えないものを見ぬく」という詩学の想像力を試していることである。

とはいえ，政治的歴史的な現実のなかで，ナルシシズムと叙情性は否応なくドキュメンタリーの方法論にとって変わられることになった。そしてこの時期に，乾は小野十三郎と長谷川龍生という二人の詩人から，多くのことを学ぶことになる。

「短歌的抒情の否定」で知られる小野十三郎の代表的な詩集である『大阪』は1939年，『風景詩抄』は1943年，そしてその方法論のマニフェストであった『詩論』は1947年の発行。そして短歌の三十一文字を「奴隷の韻律」として批判したのが1948年である。

戦前の「短歌的抒情の否定」の実験としての『大阪』『風景詩抄』について，伊東静雄の「階段教室」対談に触れながら，小野はこういっている。「これは“抒情の否定”という方法の実践をやってみたわけで，主観や主情によって現実を浅く掬ってしまう従来の詩の方法を捨てて，風景自体のボリュウムによって苛烈な現実を歌おうとしたものに他ならない。そしてその苛烈な現実とは，私にこれらの作品を相次いで書かせた抵抗の実体である戦争である。主観や主情の率直な吐露に不安を感じたのは，それは偶然的であり，一定の秩序を持たないからで，現代の詩人はそういう偶然的なものに支配されている生活の中から何一つ歌えないのである」（小野1964年）。

アナキスト詩人としての小野は，伊東静雄ら「四季」派の批判として，「短歌的抒情の否定」に抗する詩作品を書いた。そして，「抒情の科学」「純粋の抒情」を対置した。「どんなに新しい思想や観念でも，それが完全に情緒化されて従来のそれと異質の“音楽”とならないかぎり，その思想や観念の存在は詩においては何ものでもない」（「短歌的抒情」），「純粋な抒情には最も複雑な科学の無意識的是認が含まれている。それは証明を要しない」（「詩論」115），「現代詩が他の詩性一般と異なるところは，抒情が“批評”の科学と一致していることである」（「詩論」152），「私は偶然的な抒情の作用が批評の科学と一致して，その内部に自然に統一された完璧な純粋性を持っているような精神の位置について想像する」（同上）。

小野十三郎における短歌的抒情の否定とは，単なる否定で終わるのではなく，「抒情の科学」が詩の本質として再設定される。「抒情」が詩の本質である，という〈回帰〉は，「短歌的抒情」への回帰ではない。戦後，小野の詩作や詩論と出会った乾は，その軌跡そのものを小野から学んだ。伊東静雄＝四季派の抒情から出発した乾は，それを「扼殺」し，リアリズムに座標を据えるにいたる。そうした意識の変革は，詩作においては「小野十三郎から学ぶこと」によって身につけたのである（乾1962：212頁）。

小野の「抒情の科学」「純粋な抒情」という問題提起は，戦前の中野重治の『斎藤茂吉ノオト』から戦後の吉本隆明や鶴見俊輔らの「転向」研究にまでひろがる論点である。こうした主題

については機会を改めて論じることとして，ここでは，こうした小野の方法論を受容した乾の詩作の変化をみておくことにしたい。

まず小野十三郎「葦の地方」（四）（『風景詩抄』）

いつか／地平には／ナトリウムの光源のような／美しい真黄な太陽が照る。／草木の影は黒く／何百年か何千年かの間／絶えて来ない／小鳥の群が／再びやってくる／三角形状の／縁だけが顫動する金属板が／杏く／蒼空の中に光る。／機械はおそろしく発達して／地中にくぐり／見えない。／太古の羊歯のしずかさに／たちかえる。／やがて　いつか／そんな日が／或いはやって来ないとはかぎらない。／ここにいささか余裕を生じ／心の平衡と／希望があって／それらを緻密に計量出来るならば／この国の鉄には／この国の石炭や石油には／この国の酸素や水素／塩酸や硝酸や二硫化炭素にはそれだけの用意もあるだろう。／羊歯の葉っぱや／鳥たちの純粋な飛翔のような／何か　おそろしくしずかな／杏い夢のようなものも／或は。

次に乾武俊「一九五七年秋」

乾　武　俊　横揺れが激しい。／傾き疾走する特急新造車。／サパンのクッションにもたれて／しかし　横揺れが激しい。／線路がゆるやかにカーヴを切ると，／前輛の人々の後姿が／大きく動揺を繰返し，／連結部蛇腹の視野から左へ移動してしまう。／窓は雨滴におおわれた。／見たか。／狭い子宮口を通過する／難産ショックによる脳内出血／運動中枢細胞を麻痺せしめた／愛児頭蓋の裏側の点々。／見たか。／ウラニウム核分裂が放射する／衝撃波　熱線　紫外線　赤外線　中性子　γ線　の密度／その直下にいた八月六日真夏の裸体の背中にひろがるケロイドの点々。／飛沫は視野を遮るか。／マーシャル群島ビキニ海域に発生した熱帯性低気圧が／広島原爆六五〇万倍のエネルギーを持つ台風に発達して／いま九州を北上している。／モンスーン細民地帯を斜めによぎる／数理と。技術と。横暴と。／年々のエネルギーの累加について／今も記憶に新しいか。／／赤い耳輪。／女の腹部に動揺する喧騒なジャズ／冷却する外部気圧に耐え／僕の欲情になだれ込むその体温。／甦る。／夜の奉天の街角で／纏足の女は頑強に口を鎖し／日本中学生の僕に答えなかった。／その女の瘡痕におおわれた頭が／火傷のように窓に来た。／僕らの大陸はそこで絶たれ。／十八年。／横揺れは益々激しい。／雨滴は窓を滝と流れる。／午後三時，しかし暗黒。／男女は閨房のように一つに寄り添い／大きく揺れながら眠っている。／飛沫の中の僕の眼の／この熱っぽい激情は何を語るか。／疾走する電車と。斜めに襲う台風と。／その相互の凝縮するエネルギーの曲率は／もはや避けられぬ運命か。

乾の詩では，小野から学んだ空間のひろがりと，社会性をもったイメージが多用されている。これは脳性マヒで生まれた長男のことが心に重くのしかかっていたとき，それまでのすべての責め苦のイメージが乾を襲った，それを記述した詩である。この時期，乾は詩から離れようとしていたが，その後の民俗文化研究の方法論まで，詩作で得られた方法論は貫かれていった。それは，ひとつのイメージには，重層的なイメージと記憶が折り重なっているということである。ただしこうしたイメージ論は，この時点では，まだドキュメンタリーという方法論に収斂されて語られている。1950年代後半，乾は小野十三郎，関根弘，そして長谷川竜生らと討議を繰り返していたが，その立論は，詩を殺してでも，「ドキュメンタリィの方法」を優先すべきではないかという問いを発することで

あった。乾は書いている。

> ぼくはひかえ目に，次のことだけを言っておく。ぼくは自分が詩人であることを，自分が教師であることと切り離しては考えていない。教師として具体的な社会的責任の場に立ち，不就学生や，遅進生や，戦没遺児や，未解放部落の子や，朝鮮の子や，その他さまざまの現代日本社会の亀裂のなかの子をかかえ，それら数百名の子供たちの生きたねがいや悩みと直面する日常では，敗北感覚だけではやって行けない。ぼくらの具体的な抵抗は，まず詩のなかにあるのではなく，明確な社会的座標における日常のピンチとしてある。そして詩は，そのピンチの水深の測量のなかにあるのだ。“詩の配列とはなんだ。イメージとは。詩人とは”そう詰問されたとき，ぼくらの眼に“夜の海は揺れはじめる”。…大衆が浪花節に心魂を奪われているとき，ぼくらが詩のなかでする益ない苦役は，ニヒリズムやエゴイズムとはもっとも遠い，対極の行為だ。労働はつねにニヒリズム・エゴイズムとは対極の位置にある。（同上：286頁）

乾は，抒情とロマンチシズムと決別し，教師の立場と被差別の子どもたちとの関係性のなかに方法論を探りだそうとしている。「ドキュメンタリィ」とは認識論であり，その認識論から，従来の記録方法である生活綴方や，松本清張まで，さらに小野十三郎を介して，「私小説的意識の構造」をも克服の対象とした。そこではたとえば，松川事件や下山事件に対する松本清張批判も展開される。松川事件における広津和郎の方法と松本清張のそれを比較し，松本清張が「推理」によって不明の事柄の解明に向かいつつ，結局のところ「他の資料を照合することで」証拠の欠落を補おうとするその立場を批判している。乾は次のように批判する。「“推理”はつねにアウト・サイダーの眼であった。行動はかならず，その軌跡のあとに，ものの遠近法を変えて行くものであるが，行動を喪失した流行作家松本の眼は，《見えないもの》を見ぬく眼ではなかった」（同上：290頁）。

乾武俊のその後の軌跡からいえば，ここで「ものの遠近法を変えて行く」，そして“見えないものを見抜く”とは，自在に詩学や個的経験，直観もその遠近法に加えていくことにほかならない。見えないものをも見ぬこうとするその姿勢は，1950年代文化運動を席捲したドキュメンタリーの方法論とは異なっている。その意味で，1950年代文化論・文化闘争を経由して，乾がたどりついたこの方法論は，時代からの分岐を示していて，興味深い。何よりもここには差別に向かってどうアプローチするのかという問いが横たわっている。いいかえれば，部落差別の根源に，「見えないもの」をすでに感知しているのである。

4　葛の葉伝説研究

すでに述べたとおり，乾は1959年（昭和34年）から2年間在職した和泉市立山手中学校時代の1961年に，全国中学校一斉学力テストの実施に際して，学テ闘争にかかわり職場を異動させられた。転勤先は信太中学であり，そこには葛の葉伝説が残り，その伝承に深くかかわる被差別部落があった。

葛の葉伝説に取り組んだ乾の教材開発についてはおって詳論しよう。ここでは民話教材をもちいた文学教材・国語教育のなかで，古典のドラマツルギーに学ぶことで，古典研究の素養を十全に発揮することになった乾の転回をみておこう。乾が葛の葉伝説の研究に，地域の子どもたちと取り組んだのが1961年から1966年。つづいて「夕鶴」の実践が1966年，「ごんぎつね」の授業実践が1970年におこなわれた。これと並行して，大阪シナリオ学校において夜の講義「夕鶴」がおこなわれ，大阪文学協会の機関誌「新文学」に1966年から1968年まで

評論「くどきの系譜序説」（「「葛の葉伝説」の源流」）が連載された。

まず乾による木下順二の「夕鶴」分析を紹介しよう。乾はその分析にあたって，世阿弥の序・破・急を参照する。序・破・急は「①導入の部分（序），②展開の部分，③頂点（破），④反転の部分，⑤破局の部分（急）」の五つの部分に分けられる。乾によればそこでもっとも大切なことは，「序から破に転ずるところ，破から急に転ずるところ，その転換点」である（乾1972：67頁）。世阿弥のドラマツルギーへの回帰は次のような意味を持つ。「近代を一瞥して，ふたたびわたしは世阿弥に帰るわけです。なぜならわれわれの，いやわたしの可能性はわたしの故郷であるわたしの国の古典の中にあり，しかもわたしが“帰る”という意味は，わたしの故郷は近代人であるわたしにとって異郷であり，異郷である故郷への回帰は，まさに賭けのような帰郷であるからです」（同上:68頁）。さらにまた，序・破・急の三つの転換点は，「くどきとさわり」として言い換えられる。詩を通じて，さらにのちに大阪芸術大学での差別事件を通して再び出会うことになるシナリオ・ライターの依田義賢の言葉「日本の古典演劇は，くどきとさわりの上に成立していた」に導かれていた省察が，ここで再発見される。「くどき」とは，「もともと，どうしてもその思いが相手に伝わらない。伝わらないけれども，その思いは消すことができない。消しても，消しても，なおにじみ出てくる思いを，伝わらない相手に伝えたい，伝えないというそのこころのかけ橋が，思いあまってほとばしり出る，それがくどきである」（同上：83頁）。そして，「さわり」とはドラマのなかの聞きどころを指している。

自己の内側で円環運動をする「くどき」という煩悶は，しかし，出口のない円環運動ではない。ギリシャ神話のナルシスとエコーに例えつつ，「くどき」がナルシシズムではないことを，乾は強調する。「円環美学の世界は，ナルシシズムの世界です。しかし，求心する志向は，外部にむかってひろがる“くどき”に転換します。ナルシシズムは，ほんらいそういうエネルギーを内包するのです。自分にさし向けるくどきは，同時に衆生にもさし向けられねばならない。“くどき”はそうしたねがいと弁証法を持っています」（同上：85頁）。

ナルシスを思い続ける女神エコーがついに声だけになるように，しかし声となって反響するように，「くどき」は外部に作用する物理的な力となるのである。

乾は1959年に大阪府和泉市山手中学校で出会った葛の葉伝説を契機として，同和教育に本格的に取り組むようになり，転任先の信太中学においても乾の同和教育の研究は続けられ，信太中の生徒たちとの「葛の葉伝説」研究として結実する。

解放教育読本『にんげん』中学生に収録された「教材『民話のかげに』――わたしたちの「葛の葉伝説」の研究――」から，当時の活動を知ることができる（『にんげ』1977年）。

「葛の葉伝説」は，信太に伝承する安倍清明の出生にまつわる異類婚姻譚である。信太の森の白きつねが安倍保名に助けられ，その恩から保名の妻となり子（＝童子丸，のちの安倍清明）をもうけるが，きつねとしての素性を知られ，「恋しくば　たずねきてみよ　和泉なる　信太の森の　うらみ葛の葉」の歌をのこして永久に立ち去るという物語である。それは説経節「信太妻」として語られ，竹田出雲『芦屋道満大内鑑』として人形浄瑠璃の外題となった。瞽女，春駒から，木偶箱廻しまで，門付けの定番の曲でもある。

この伝承について，信太中の生徒たちの研究は，その動機をつぎのように書いている。

〈研究の動機〉

夜，信太山から臨海工業地帯のほうを見ると，工場のえんとつから，まっかなほのおがめらめらと燃えている。それを見るわたしたちの心のなかにも，“信太のきつね

火”が燃え上がる。／二年前に卒業していった先輩たちの研究を受けついで，わたしたちは，さらに深く，郷土のこの伝説を調べてみようということになった。最初は，きつねが人間と結婚して子を産むなんて，うそみたいな話だとは思いながらも，なにかこの話に心ひかれるものがあった。「根も葉もない話なら，何百年のあいだ，人びとの心に受けつがれてくるはずがない。この話のなかには，きっとなにかだいじなことがかくされているにちがいない。そのだいじなことをさぐりあててみたい。」この気持ちが，最後までわたしたちの研究をつらぬいていた。

臨海工業地帯と信太の森の対照が印象的な現状認識のもとで――子どもたちによって書かれたとはいえ，この対比には乾における，小野十三郎のもとでの研鑽やドキュメンタリー論研究の経験が反映されているだろう――，調査班は三つの班をつくり，土地の古老の聞き取り，「先輩のいままでの研究の成果と問題点」の整理，そして史資料調査をおこなった。古老たちには説経節の「信太妻」の物語が伝承されていた。一方，『和泉市史』に収録されている「泉那四県石高寺社旧跡並地侍伝」では巡礼が出会った「橋の下のひとりの女」と，巡礼の一人とその女との貴種婚姻譚が収録されている。調査班は，「橋の下」を「河原」と読み替えることで，被差別民の女と巡礼との婚姻の物語がオリジナルであり，そこから安倍保名の物語が形成されたと推論する。そして，「土地のおばあさんから聞いた実話だが，部落の女の人が結婚して産んだ子どもは，父の名も知らずに成人したとうことさえあったようだ。「葛の葉」の悲劇は，うそみたいなむかしの話ではなく，いまもまだ，現実に生きている」と結論するに至る。

「葛の葉」伝説が部落の物語として再獲得されるこのプロセスは，すぐれた同和教育の実践であると同時に，物語論のひとつの論証となっている。そして，乾は生徒たちのこの調査を導き，かつまた自らがそれに導かれながら，自らの「葛の葉伝説」研究をまとめていった。「『葛の葉伝説』の研究」（乾1972）を参照しよう。

乾の着眼点は三つある。第一は先述の『和泉市史』に収録されている「泉那四県石高寺社旧跡並地侍伝」である。そこには次のようにある。「狐之由来ハ　昔巡礼三人伯太山中を通りければ谷川の石橋之下に女隠レけり　怪敷思ひ問ければ　我ハ信太之者也　親縁に付けれども夫気に不入　右に付欠出候　各方ハ追手かと思ひ候故　隠レ申し候」。そして女は巡礼とともに信濃国に行き，巡礼の一人の妻となる。この夫は更科郡高梨殿という地侍であり，三人の子をもうける。あるとき末の三歳の子は昼寝している母から尻尾が出ているのを見てしまう。狐であることが露見した母は「恋しくハ」の歌を残して立ち去る。その後信太に母を捜しに来た弟（兄二人は高梨を名乗り，弟は篠田を名乗る）は，「土生之宮之前」で舌をかみきった狐をみつける。そこで村人に頼んで，信濃堂と呼ばれることになる堂を建立する。

もうひとつは，乾が子どもの頃から歌って遊んでいたわらべうたである。それは「下駄かくし」とよばれている。「下駄かくしチュウレンボ　橋の下のねずみは　ぞうりをくわえてチュッチュクチュ　チュッチュクまんじゅうだれがくうた　だあれもくえへんわしがくうた　裏からまわって三軒目　表の看板三味線屋」。乾は盛田嘉徳のアドバイスから，「チュウレンボ」は穢多身分の蔑称である「チョウリンボ（長吏＋ンボ）であることを知る。橋下で草履製造に従事し，三味線屋でもあるこのわらべうたで歌われる対象であり，「橋の下のねずみ」とは，被差別部落である。

さらに，安倍清明の手になるという由来をもつ，陰陽師の由来と占いの概説をしるした「簠簋（ほき）内伝」（正保4＝1647の版本が残る）には，安倍清明の母について「化来ノ人也。遊女往来ノ者ト成リ往行シ給フヲ」とあり，もと

もと「遊女往行」の被差別の芸能民であったことが推定される。また鎌倉期の「興正菩薩感身学生記」（1282）には，西大寺叡尊が取石の非人宿を通過し，非人保護の起請文を捧げたと記している。高石市取石はその東に信太山丘陵に連なり，そのふもとが和泉市舞である。そこには先の「地侍伝」において舞太夫が居住し，信太明神の祭礼で役儀を務めていたこと，陰陽師もまた居住していたことが記されている。こうして，舞村＝取石の地には，信太明神に仕える芸能の徒たちがいたことが推定される。

そして，信太明神＝聖神社は，旧南王子村の被差別部落が奉仕していた神社であったことが，この調査の出発点であり，要であった。部落の人びとはその坂下の「どうけ原」に，1600年頃に移住したことが伝承されている。伝承は舞村から「どうけ原」に移ったのかもしれない。こうして，「葛の葉伝説」は芸能の民を介して，今日の被差別部落につながる回路が見出されたのである。

おわりに

戦後〈同和教育〉は，1953年の全国同和教育研究協議会の結成を期に全国展開がはじまったとされ，その趣旨は被差別部落の子どもたちの教育権の保障にあった。同時に社会科教育を中心として，歴史認識の刷新をともなう部落問題の学習が広まった。部落史や人権認識を中心とした「同和教育」において，乾は国語教育を介して民俗伝承の調査研究および物語研究の手法を持ち込んだ。それは，1950年代文化運動の成果を吸収しながら，詩人として構築してきた詩学にもとづいて，「見えないものを見ぬく」想像力を駆使することであった。それによって，民俗文化を部落解放運動の政治の次元へと簡単に接続するのではなく，しかし被差別部落の成立と文化の淵源の核心に迫る方法論の確立が実現されたのである。したがって，〈同和教育〉というジャンルを離れても通用する高度な文化研究を成立させたのである。しかしまたこの詩学＝文化研究は，被差別部落とその子どもたち・親たちとの緊張関係抜きには成立しなかったともいえる。それは，ここから流れ出て，やがてひとつの巨大な河となった乾の仮面論・芸能論の源流である。

引用・参照文献

小野1962　小野十三郎『奇妙な本棚　詩についての自伝的考察』第一書店

乾1962　乾武俊『詩とドキュメンタリイ』，思潮社

乾1972　乾武俊『民話教材と同和教育』，明治図書

乾1995　乾武俊『民俗文化の深層　被差別部落の伝承を訪ねて』，部落解放研究所

ドゥボール2004〔1967〕　ギー・ドゥボール『スペクタクルの社会』木下誠訳，ちくま学芸文庫

鳥羽2010　鳥羽耕史『1950年代　「記録」の時代』，河出書房新社

友常2010　友常勉「中国木刻から版画へ――戦後日本の民衆版画運動・序説」，東京外国語大学論集第80号

友常2012　友常勉「民衆版画運動の50年代」，国立近代美術館編『実験場50s』，国立近代美術館

明治図書1977　『にんげん　資料集　部落・反差別編』